
過去の記憶は今のトラウマ

紫苑 鎌鼬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の記憶は今のトラウマ

【Nコード】

N9876Y

【作者名】

紫苑 鎌鼬

【あらすじ】

とある国でとある学園に通う大貴族の娘リユネは婚約者である王子リクトに日々苦しめられ傷つけられていた。廊下で鉢合わせでもすればすぐに追いかけられ首を絞められ、口付けられる。従わない私が憎らしい。そう勘違いし怯える彼女と本当は彼女のことが愛してやまない独占欲大で俺様な彼とのすれ違いな恋愛物語

今の関係

「はあっ、はあっ、…はあっ」

早く…早く逃げなきゃ…！

ダダッ…！

鎖骨辺りまである長く緩やかな赤い髪がフワッと浮いて流れていく。

私はとても広い校舎の中を全力で走っていた。

右手で授業で使う資料の束と筆箱を抱え、

本来一本道でたどり着くはずの教室までの道のりを、

私は今、ある人から逃げるためだけに遠回りをしていた。

「待て…！」

彼の声がすぐそばまで迫ってきていた。

ポロ…ッ

「……あ！？」

思った以上に近くで声がしたため、

私は筆箱を落としてしまった。

カタンッとそれは音をたて壁際に落ちた。

ヤバ…！

私は急いで落としてしまった筆箱を左手で拾ったが…

ドンッ！！

「うつ…」

と壁に叩きつけられた。

その瞬間背中に大きな衝撃を感じて思わずうめく。
それは捕まったことを悟った瞬間でもあった。

背中に感じたとき反射的に上を見上げると…、

視界の隅で彼の腕が私の方へと延びていくのが見えて恐怖した。
だが身構える時間などなくて…

ガッ”！！

と首を絞められた。

力が抜けて両手からものが落ちる。

ヒラリと資料の束が舞い散らばって落ちた。

私の体を他から見えぬように彼の影で覆われていた。視界が暗い。

「くうウ…ッ」

「もう逃がさない」

思わず首を絞めてくる腕をつかむ。

そして彼をにらんだ。

く…苦しい…なんでいつもこんなこと…

そんな思いで見つめてた。

しかし彼は不適な笑みを浮かべながら私を見下ろしてた。

「逃げるな。俺に従え。」

いつもお前は従わない…苛立つんだよ、リュネ。」

私の心中を察したのか彼はそう呟いた。リュネというのは私の名前だ。

名前を呼ぶときはいつも不機嫌だ。

彼の青い瞳が苛立ちをさらに募らせて首を絞める力をぎゅっと強くする。

「ッ…ウウ」

息が…できない、苦しい。

助けて…はなして…。

「…また、はめてないじゃないか、はめろっていっただろ、リュネ」

ふと彼は首から手を離し、その腕を背に回して反対の手で私の左手を手を取った。

彼は器用に口元まで手を引き寄せて口付けた。

「……ッ!？」

私は望んでいないが婚約を結んでいる。

彼は、いつもそうやって私が婚約指輪をしないことをとがめるように口付けてくるが、

慣れるわけもなく悪寒が走る。

息ができるようになった状況なのにできなかった。

彼の行動する理由が分からないのだ。そして…怖い。

「今、持っているか？」

「…も、もって…、ない」

「な、んで…ーンッ!？」

ただ、わからないままに聞いた言葉は
顔を近づけてきた彼の中に飲み込まれた。

「んう……んんッ」

口付けられ、逃れようとすればするほど彼は私を拘束する。

ひどく苦しくて怖くて何がなんだかわからない。

そういうとき彼は私に息を吹き込んでくる。何度もキスを繰り返す
彼に、ただされるがままの私は呼吸がままならないからだろう。

本当に不思議で怖い存在なのだ、彼は。私を残酷なほど苦しませる
ときもあれば、こういう風に触れてくる。

「んう…や、やめ……」

彼が一息ついて再び口付けようと
してきたとき…

キンコンカーンコン

休み時間が終わる5分前の鐘が鳴った。

「…チッ」

彼は悔しそうに舌打ちし、私から離れた。
そして私の床に散らばった資料を束ねて筆箱も拾うと、解放された

ばかりの呆然としている私に差し出してきた。

「…ほら」

彼は私に受けとるように促す。

「……………」

ふと我にかえった私はだまって受け取った。
ちよつとは優しいんだなと思いつながら

「…拾ってやったんだぞ、感謝はないのか？」
青色の瞳が怪しげに見つめてくる。

「あ、有難うございます……………殿下」
一体誰のせいだと思つて…！

そう心の中で私は毒付きながらもお礼をのべる。

「礼なんかより、俺の名前…呼べ。」

「え…？」

何で名前なんか……………。

そう思つて見上げてみると、

金髪をかきあげて

我慢しきれなかったのか不機嫌顔で、

「リュネは名前で呼べっていったら…！ほら、拾ってやったんだ
からはやく呼べ」

そう、つつかかってきた。
なんて俺様なやつだろう。

優しいだなんて思ったのは間違いだったんだ。

「…リクト殿下」

私は洪々名前を呟いた。

そう彼の名前はリクト。

この国の第二王位継承権を持ち、

貴族のなかでもほぼ王家と対等な位を持つ大貴族の長女の私と婚約をしている人だ。

「そんな嫌そうに呼ばれたくはないんだが…まあいい許してやる。」

彼は私が呼んであげたにも関わらず

不満顔であつた。納得がいてないらしい。

「リユネ、次は必ず指輪してこいよ。これは命令だからな！」

そう彼は私に言いつけ去っていった。

その後ろ姿を見ながら

「…あんな邪魔になるものつけるわけないじゃん」

と、小さく呟いた。

ごそごそとポケットのなかを探って1つの大きなルビーの指輪を取り出す。

キラツと輝きを放つ大きなそれは、

それなりの重さがあつた。

そんなものつけたら、手作業には邪魔だし、王子を狙う女子たちの

標的になってしまう。私はそれが嫌だった。

「私を苦しめて傷つけて遊ぶのが楽しいんだ、彼は。」

そうとしか私には考えられなかったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9876y/>

過去の記憶は今のトラウマ

2011年11月29日21時46分発行